

二つの『田園』交響曲の音楽会

志村 良知

ベートーベンの六番とブラームスの二番をカップリングして、二つの『田園』交響曲、と題する音楽会に行った。演奏は成城管弦楽団。名前の通り成城大学OG・OBが中心というアマチュア楽団、指揮は松岡究（はかる）氏、オペラの指揮やアマチュア管弦楽団のトレーナー・指揮者として活動している方である。

アマチュア管弦楽団の演奏を聴くのは五〇年ぶりだ。学生時代音楽サークルに所属していたので、演奏会には、交流があった大学の音楽サークルや管弦楽団をエールの交換で招待しあっていた。

今回は、成城管弦楽団のチエリストの奥様が家内の友達で、奥様ご本人は神奈川県開催のねんりんピックなるものに参加のため聴きに来られず、招待状を下さったという縁による。

場所は柿の木坂上がった所にある、めぐろパーシモン・ホール、定員二二〇〇名の立派なホールで、七分くらいの入り。

ベートーベンの『田園』は一番好きな交響曲で、レコード（古い！）も何種類か持っている。お気に入りにはイッセルシュテット／ウィーン・フィルでこれは自分でデジタル化してPCに入れている。ブラームスの二番もその明るさが好きで、第四楽章の乱痴気騒ぎにも例えられるクライマックスが心地よい。

松岡氏の指揮は、奏者を真つすぐに見て非常にわかりやすい指示を的確に出していくスタイルで、私自身も、指揮者に操られて音を出しているような気分になった。

弦楽器の美しいアンサンブルは膨大な練習量の賜物であろう。個人の技量が多量にもろに出る管楽器には「がんばって」と心の中で声援を送り手に汗握る。ブラームスのホルン四本の間かせどころは素晴らしかった。多少とも音楽を齧る者として、社会人になってからも趣味として精進を続け、オーケストラで演奏できる技量を維持するのはどんなに大変なことか想像できる。指揮棒に喰らいついていく姿を見ているだけでうるうるしてくる。

終わって外に出ると、小春日和は『田園』を思わせる風雨になっていた。